

# 神楽通信

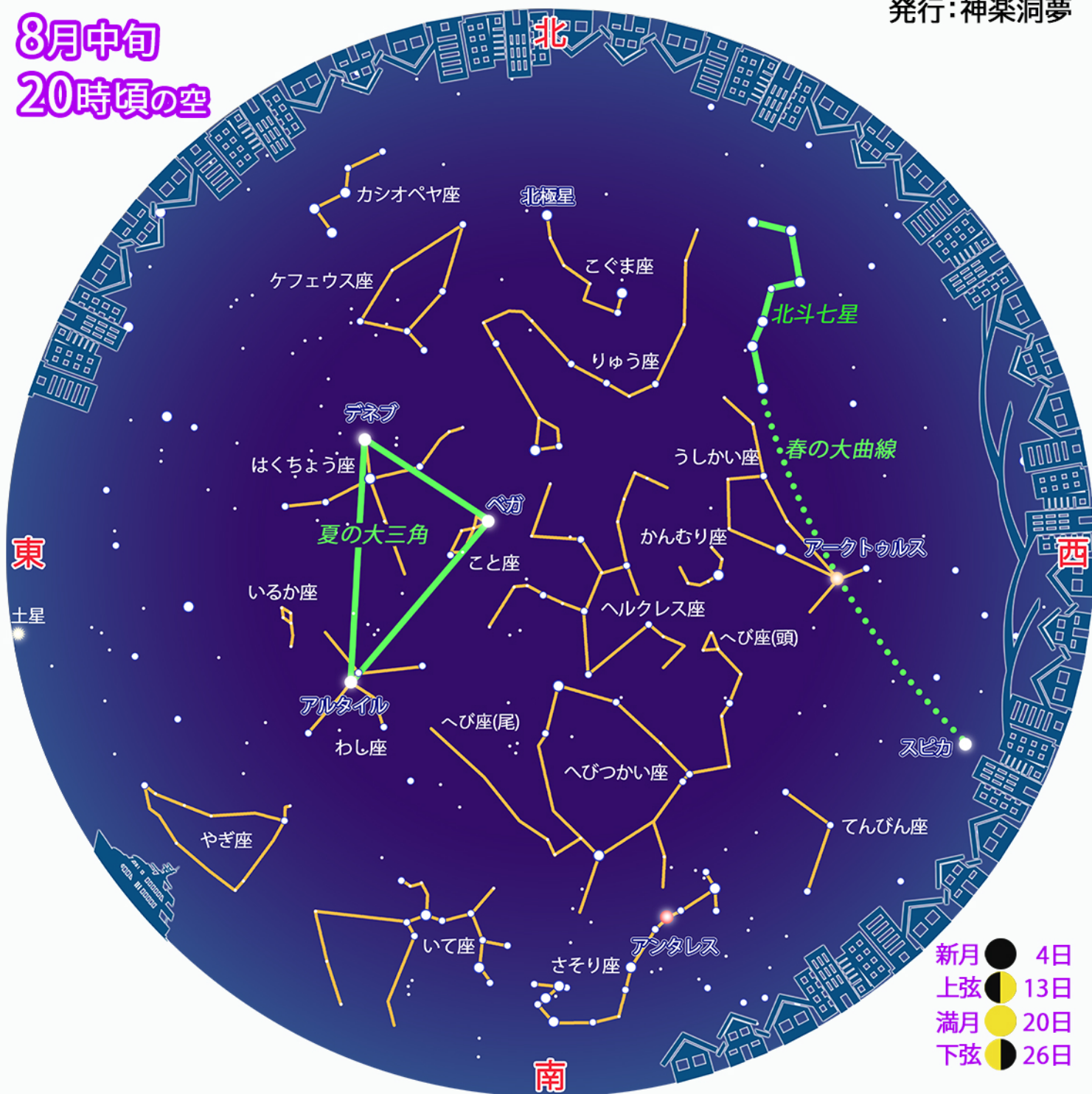
No.102

2024年

8月号

発行:神楽洞夢

8月中旬  
20時頃の空



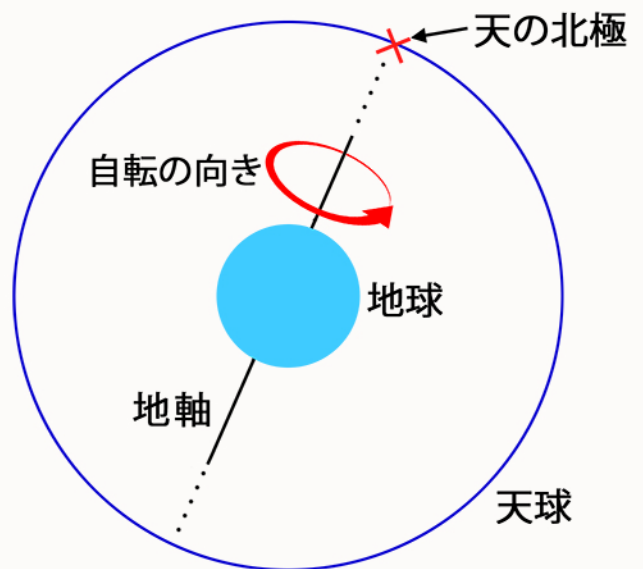
8月に入って、春の星たちも西の空に傾き、頭上に輝くベガから「夏の大三角」を空高くに結べる季節になりました。夏休みやお盆休みでじっくり星を眺められるなら、流星の観察をしてみるのもいいかもしれません。今年のペルセウス座流星群が最も見頃を迎えるのは、8月12日の23時ごろ。半月に近い月が沈んだ後です。流星に願いを伝えて、星空と向き合う夏もロマンチックではないでしょうか。

## 実は動いている道しるべ 北極星

こぐま座にある2等星のポラリス（北極星）は、地球の自転軸の延長方向にあるため、ほとんど動かず、他の星たちが北極星のまわりを反時計回りに動いて見えます。

そのような特徴をもつ北極星は昔から旅や航海で道しるべとして重宝され、日本でも昔、十二支のうち北を示す「子（ね）」を用いて「子（ね）の星」と呼ばれてきました。

しかし実際には、北極星はほんのわずかに動いており、地球の地軸の延長線と天球の交差点である「天の北極」からおよそ40分角（1分角は1度の60分の1）ほど離れていて、満月およそ2～3個分ほど動いています。



天球と天の北極の考え

## 未来の北極星はベガ！？

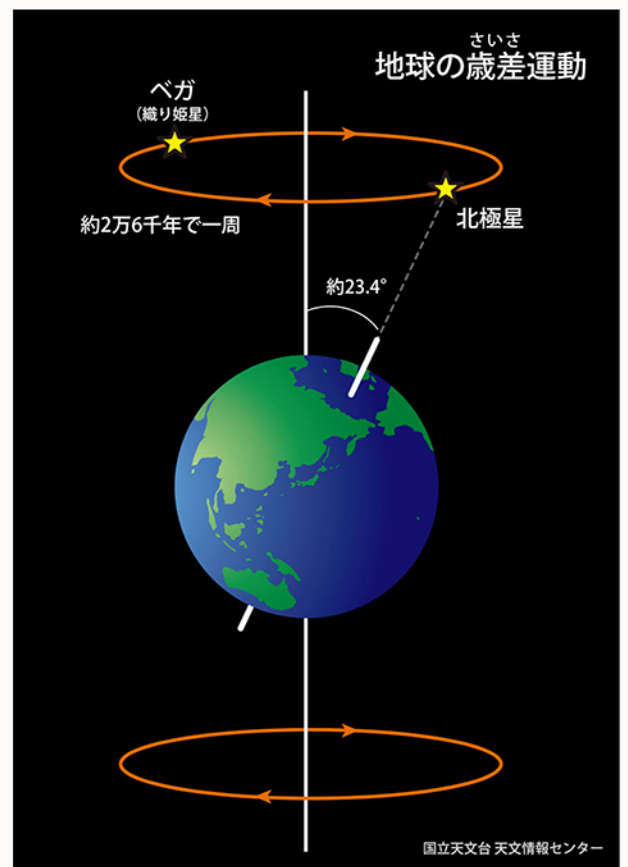
実は現在の北極星はずっと天の北極の近くにあり続けるわけではありません。

これは、地球の自転軸がおよそ2万6000年ほどの周期で傾いたコマのように回る、「歳差（さいさ）運動」という現象のため、天の北極が動いていくからです。

現在の北極星は2100年ごろに最も天の北極に近づき、その後は少しずつ離れていきます。

そして今からおよそ8000年後には、はくちょう座のデネブが、およそ1万2000年後には、こと座のベガが天の北極の近くに輝き、2万6000年後に再び現在の北極星に戻ります。

まるで星たちが「北極星」というタスキを星空の中で繋いでいるようです。



国立天文台 天文情報センター

画像：国立天文台